

新や(2)86⁹ 極小銅鐸
まつはらない

天つぎ
改行

2.652³ - 1/6

近畿を中へに伝わる
勸請吊り

■

新年に無病息災を願って吊されたのみら
る鎌倉末期の木札「巻数」(勸請)板か、

滋賀県彦根市の松原内湖遺跡で見つかった

と、滋賀県文化財保護協会が発表した。

・中世の巻数板の出土は、金沢市に次いで全

国二例目

・今も近畿地方を中心に続いている正月行事
のルーツと一貴重なという。(厚真図版 450・451)

参照)

縦は 8 セン 横 27 日 8 セン 厚さ 0 日 7 センの

絵馬形

・元徳3(1331)年正月8日の日付けで

般若心経などの経を読み一年間の息災を願

うと墨書されている

巻数板は、厄よけのため、家の入り口、果

落入り口などに吊された

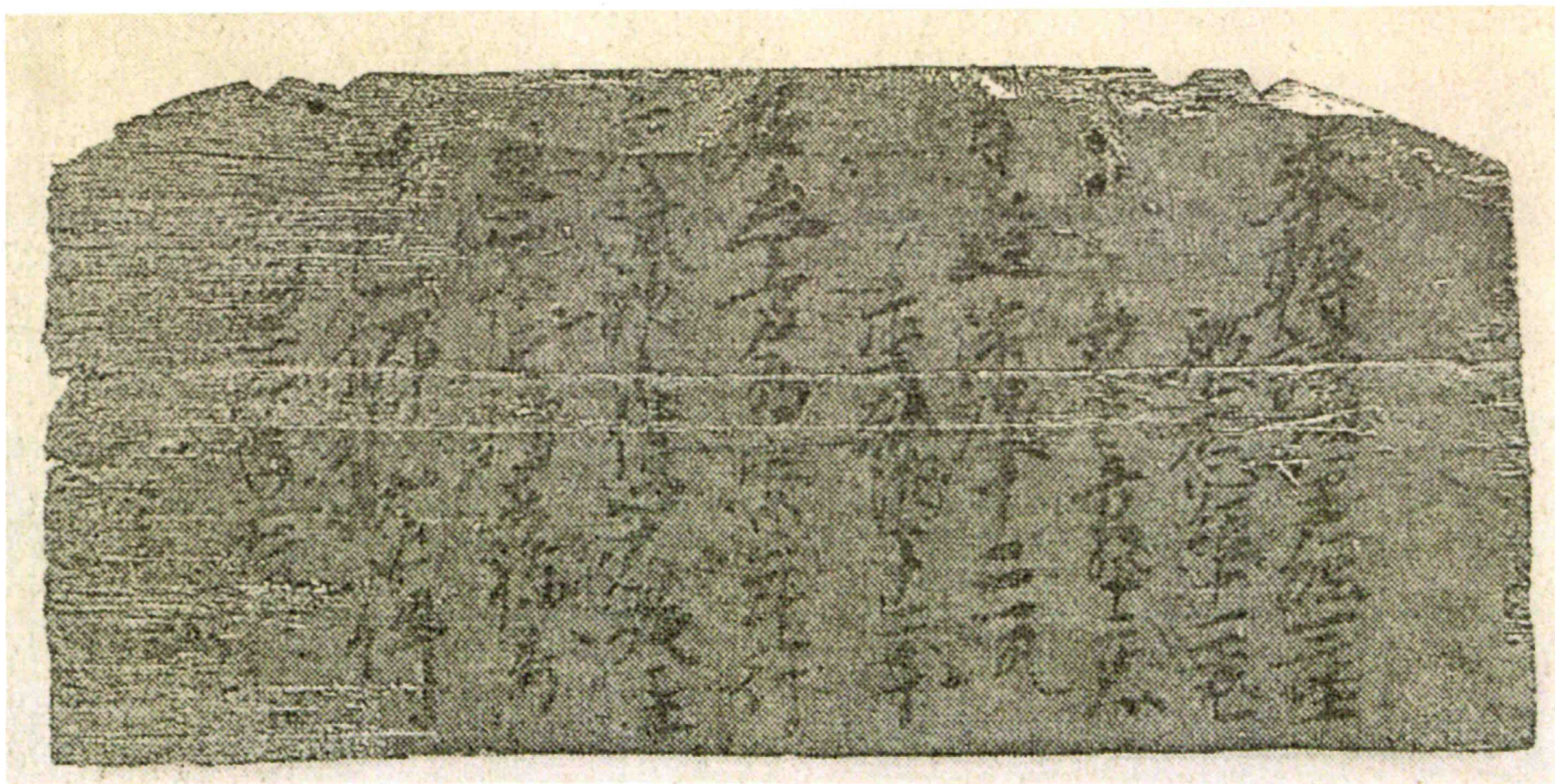
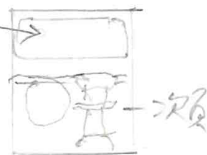
という。(朝日新聞)平成二十六年十二月五

日付へ鎌倉期の「厄よけ板」出土(参照)

・カラー

2,652^p - 4/6

・頁の上の方に、横を限定一杯はみ出させて掲載下さい。

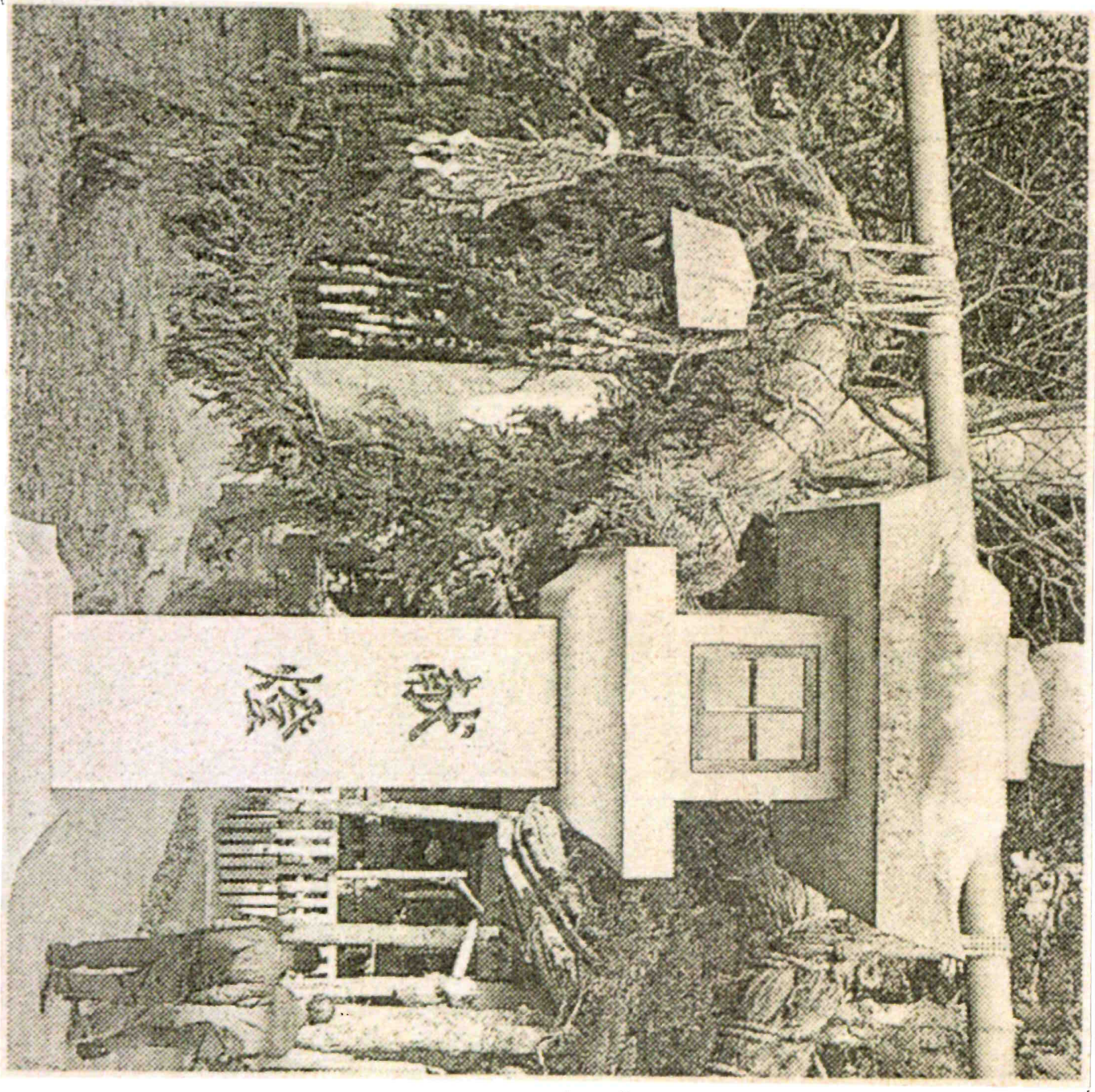


写真図版 450 ^{ひね}滋賀県彦根市の松原内湖で出土した「^{まっほうない}巻数^{はでま}(勸請)板」

「朝日新聞」平成26年12月5日付 <鎌倉期の「^{やく}厄よけ板」出土>参照

・頁の下の方に、大まか
掲載下さい。

↑
439



2.652^p - 5/6

439

1409 1209

母真因版 451 滋賀県東近江市の長緒神社

・^か巻^は数^は板^はに似た正月行事「勤請^{けんせい}吊^たり」^か、^か今^はも近畿を中心^にに伝わる

・^か勤^は請^は縄^はにつるされてゐるの^か、^か地区の安全を祈願する板

1309 「朝日新聞」平成26年12月5日付<鎌倉期の「^だだ^はサ板」出土>参照

F

印象 (♫) 2651
- 8/18

2,652^P - 6/6

⑦ 2652
- 5/6

力^{ちから}が^があ^ある^る 国^{くに}の^の真^ま実^じ版^{はん} 451 を^を 日^ひ本^{ぽん}の^の輪^{りん}に^に状^{じょう}の^のもの^{もの}の中^{なか}に^に

見
3
と

ありいは、
 近畿地方に
 居住して
 いる扶余系
 殷民の子孫
 であり、
 一年間の
 無病息災を
 願つて、
 親請吊り
 を行なつて
 いるのか
 を知れな
 い。

円形を好む種族

紀上134^P

2,653^P-1/4

②599^P-3/2

紀上134^P
宇治谷上47

紀上135^P
②599^P1/2~3/2

大背飯三熊之大人

話を元へ戻そう。

天穂日命は

葦原中国乃邪馬台国と根国との間に有る

拘奴国つまり中国地方の邪一き鬼を撥い

平らげる為遣わされた

一かし、天穂日命は後日分かつた

とながら大己貴神に倭り媚びて三年にな

るまで復命しなかつた。

そこで今度は、天穂日命の子である大背飯

三熊之大人が遣わされた。

このところ、神代紀下第九段本文には、

次のように記されている。

天穂日命を以て往きて平けしむ。然れど

此の神、大己貴神に倭り媚びて、三年にな

るまで、尚し報聞さず。故、仍りて其の子大

背飯三熊之大人、亦の名は武三熊之大人を遣

す。此亦還其の父に順りて、遂に報聞さず。

天行

とある

つ ま り、

あまのほひのみと

① 天曉日命は、三年になるまで報聞しなかつた。

友

② 大背飯三熊え大人は、遂に報聲しなかつ

左

と
い
う
こ
と
か
分
る

水

現在

通常

大背飯三熊
え大人は、
其の父（天穂日命）

大順つて（倭つて）遂に復命しなかつた

日本書紀(上)

日本古典文学大系

岩波書店、三四頁参照

と解されていようである。

なるほど、

あまのほひのみこと

「天德日命加」
血緣的「遠」
大己貴神

に倭り媚びたし

と
り
う
言
い
方
は
理
解
で
き
る

か
し
な
が
ら

「大背飯三熊元大人が、父である天徳

日命に倭つた

な
ど
と
川
う
言
い
方
は
、
一
般
的
に
は
し
な
い

は思ふ

次頁6行

武軍 1918 331年の3年前 2512 328年天徳日命 紀上150 常世郷 2594 151年 2596 4年後 小林1058 2594 151年 2596 4年後 小林1058

ほうぶん 小林 247 報聞

密するところ (小林に170) 前頁

2,653 - 3/4

推おー量るところ
 察するところ
 へ大背飯三熊え大人は、母国の父の所にた
 どり着き得たならば、必ずや父と同
 様、いずれ天上の国に復た、いつの日か復
 命したであらう
 と思われ。と
 ころ、次から、次のように考えて
 みた。
 天徳日命は、三年になるまで報聞しなかつ
 た。
 しか、その後、天徳日命(少彦名命)は
 常世郷(邪馬台国)へ帰還して復命した。
 そこで、天徳日命は罰せられず、
 後年、天徳日命の子孫が、出雲国造
 として出雲大社の祭祀を主るようになった
 という次第なのであろう。
 大背飯三熊え大人は、天徳日命
 が出征した三二八年の四年後の三三二年頃
 までであったから、父に順い、後を追って
 葦原中国へ降っていったか、武運つたなく、

2,653^P - 4/4

やまと 2651^P

↓

戦死してしまつたのではなからうか。
すなわち、大背飯三熊え大人は、父に順つて
葦原中国へ降つていつたか、三年間待つて
みて父に順じて何の音沙汰もなく、
とう遂に復命することが無かつたのであろう
と推察される。
なお付言すると、天穂日命と大背飯三熊
え大人の二人は、後述の天稚彦のように罰
せられたわけではない。

米

1人 紀上78⁶⁵
詔問 紀上1023¹ 紀上135¹ 萬が 紀上2099¹ 又、654¹
見と尋ねぬこと 紀上2660¹

天元算報 紀上2606¹ 少彦名命 紀上131¹ 記(西)78¹
少彦名の邪馬台への帰還 紀上332¹ 大昔 紀上135¹
大昔板の出行 紀上2653¹

天稚彦(天若日子)

倭国には、熱気がみなぎっていた。

朝貢の使者として

邪馬台国の都へ上洛してきた少彦名命(天穗日

命)が、我が子大背飯三熊え大人の葦原中国

(拍奴国)での戦況を案じながら母国へ去

つていったから、一年早くも、三十四年

の時に流れていった。

大背飯三熊え大人は、母国のことを

全く何も知らずに葦原中国へ降つていったの

だから、萬が一にも、母根国の父のところへ

たどり着くなどというわけはあるまい

「たぶん、戦死したのだろうな」

と、都人達は噂しあった。

ここに高皇產靈尊(天神天皇)は、さらに

神々を召集し、誰を葦原中国(拍奴国)平

定に派遣したらよいかを諮問された。

すると神々は、

紀上210⁷
(記上)119⁷ 凡記429⁷末
土記881⁷ うつ付る⁷ 2.655⁷-1/3

記(上)79⁷
紀上135⁷
土記59⁷-1/3 6~75⁷

記(上)78⁷ 母か? P
新代(1)-131
上末2⁷

「天國玉」(母親か)營する神の子の天稚彦(天若日子)が勇士でございます。この神を派遣され、お試になつてはいかかでございます。と申し上げた。

そこで高皇產靈尊(天神天皇)は、天稚彦(天若日子)に、天鹿兒弓と天羽羽矢を下賜して遣された。神代記。神代紀下第九段本文参照。

おそろく御自分の皇子

① 天若日子という名は、天上界の若様(世嗣)の意で、本来は普通名詞である。

天若日子を主人公とした説話は、摂津国風土記逸文、宇津保物語、狭衣物語などに、にも見られる。「古事記」新潮社、七八頁、注七参照。

② 神武即位前記には、所御の天羽羽矢一隻及び歩鞍を以て長髓彦に賜示ふ。長髓彦、其の天表を見て云

と記されてゐる。

つまり、曰天羽羽矢^{あまのやはや}は天表^{あまつしほ}であつた、と

いう。

● 恐らく、

（八咫鏡とは別の倭国古来の天表）

△ 高皇產靈尊（応神天皇）は、

天上界の若

様（天若日子）に、

天表である曰天羽羽矢^{あまのやはや}は

を下賜して、葦原中国（拍奴国）平定に遣わ

された ✓

と云ふことなのであろう。

● また、さらに言えば、

△ 天国王（国土を經營する神）とは、

高皇

產靈尊（応神天皇）の別名であつて、

一

天国王の子の天稚彦（天若日子）とは、何代

目かの応神天皇の長男のことであらう。

と想像される。

● 人皇の世（応神天皇の御世）の出来事とし

て記述するわけにいかぬ、神代の物語といた

ために、

△ 天稚彦（天若日子）という普通名詞

で表現したものと思われる。

＊

はさう 挟み撃つ 2,655P-3/3
元1781P

主8ハハ 拳兵 2587P
秘命 21461P

の 忍びやか 1004P
「一」 2657 1/2 重1 広327P

天稚彦が大軍を率いて葦原中国（拘奴国）
へ攻め入ってゆく準備が、着々と整えられて
いった。四国の南の沖を漕ぎ渡って
倭国から母国へと、忍びやかに天降っていった
のではなからうか。
その使者は、威厳を保って大己貴に
「倭国は拘奴国討伐を開始しようとしている。
つては、かつての盟約通り、倭国と時を同じくして、
母国も拳兵し、拘奴国を挟み撃ちにせよ
と、厳命したに違いない。」

＊

天竺・同命の侵攻 ④ 2513' 12行へ

そろとぼけ 空砲 1319 元 1755 元
 あいはらのこき 丑男 128 元 668 元 1068 元
 うちの 打物 197 元 393 元
 ま 負 43 元 2073 元
 さんばい 惨敗 元 929 元
 ま 負 43 元
 1人4人 侵襲 1146 元
 ま 負 43 元
 ま 負 43 元
 大軍と 大敗北

敗北

を喫した。

勝ったぞ。

勝ったぞ。

倭軍を討ち破ったぞ。

破ったぞ。

一度ならず、二度ならず、三度までも、

一度ならず、二度ならず、三度までも、

いっに見事に倭国軍に勝利したぞ。

勝利したぞ。

拘奴国中が、倭国の大軍勢喜びに沸きかえった。

喜びに沸きかえった。

大己貴は呟いた。

を壊滅させた。

何という呆気なさだ。

戦いが始まったばかり

だというのに、倭軍はもう負けてしまったのか。

負けてしまったのか。

西の倭国の軍が侵襲してきたことを知らせるとともに

緊急の軍兵出

拘奴国中およびその今下の国々に

拘奴国の都を目

動を命じる烽火を見て、

拘奴国の都を目

指し、打物をとって駆け向かっていった大己貴は

拘奴国軍が、倭国軍を撃破した。

という噂に驚いた。

狂喜せんばかりの

とばかりだが大己貴は、心の内の動揺をひた

かくしに隠して、さらけ出した。

都へと歩を進めていった。

拘奴国王・延島

空砲、何くわぬ顔で、

拘奴国王・延島

郎の前に、こまった葦原醜男、

つまり大己

貴は、

大己

貴は、

大己

2.656^{P-3/3}

くちあ え P (ゆく) え
口惜 1631 祝辞 1059^P
唇 633⁰

は 土人 え
馬也せ参す 1788⁰
返す返す 366^P

て 手柄をたてようと早いで馳せ参い
てきたのですか、早くも決着がついて、
武勲のあげようもございませぬ。
拍奴国が倭国に大勝したのは誠に嬉し
い。ありますか、我國母国にとつては返すがえすも
残念な事です。と戦勝の祝辞を述べた。
そーて大己貴は、いかにも口惜ーそうに唇
をかみながら、東の国へと引き返していった。

米

下正姓 紀上197^p
② 265⁹ 紀上279^p 3斤
紀上138⁷ 未

2658
-4/5 1157

453

天稚彦(天若日子)は、久しく復命もせ
ず母根国に逗留しているという。この度は
の神を遣したかやろうか。天稚彦が淹
留まてゐる理由を問わねばなるまい
と仰せられた。
ここに、もうものの神、および思金神は、
雉、名は鳴女という者を遣わすかよう
と答えた。(記)
*
雉は天から飛び降りて、天稚彦の戸の前に
植つてゐる湯津杜木の木の梢にとまつた。
時に、天稚彦の侍女曰く天探女曰く(天佐具売)
が、雉を目ざとく見つけ、天稚彦に謂つて、
「奇しい鳥が来て、杜の杪に居ります。こ
の鳥は、その鳴く音が不吉です。だから、射
殺するのがよろしいでしょう」
と進言した。

讀者の非義を憤り、(良寛)
 記(黒) 80^p
 二人が } 紀小 38^p

コクヨ ケー20 20×20

Tel 06-6761-2487 06-6761-0336 H16.1.30(金)PM 2:00 高津高等学校 校庭に碑が 立っている由。
 紀上 388 389 1214 2.658^P-3/5 紀下 571^P 1213 紀上 554^P 紀上 89^P 紀上 87^P 紀上 189^P 紀上 554^P 紀上 189^P 紀上 430^P

冠せらるゝ、
 という。(「日本書紀」(上)日本古典文学大系
 岩波書店、五五四頁、補注一—三八参照)
 ② 難波の高津には、仁徳天皇の「難波高津
 宮」が置かれた所としてよく知られている。
 ・今の大阪城址の辺と思われ、遺跡の上
 ではまだ実証されていらない。
 ・大阪市天王寺区餅差町の高津高津学校校庭に、宮
 址の碑石が建てられていり、
 あるわけではない、という。(「日本書紀」
 ① 因みに述べると、
 神武即位前紀に「天磐船」、神代紀上第五
 段本文に「天磐櫓樟船」、同第五段一書第二
 に「鳥磐櫓樟船」とあり、神代記には「鳥え
 石楠船神、亦名謂天鳥船」とある。
 ・「磐」は、堅固なものの名称である。鳥は
 地上・海上を自由に飛ぶので、交通の手段に

天磐船の泊る故を以て、高津と號す。云
 とあるで、(續歌林良材集上)

新や(1)-131^{中上} 朝日新聞 5file 2658⁰-4/4 中田正徳
 石①-161 2. 658⁰-4/5 ③2657⁰-3/2 ④2658⁰-3/5
 月立元 429 ④2658⁰-3/5 9行 従神々々女④2658⁰-3/5 9行

(上) 日本古典文学大系、岩波書店、三八九頁、
 注一四、同(下)五七一頁、補注二五一、三参照
 ③ い か い と も あ れ、日 撰 津 国 風 土 記 逸 文 に
 よれは、
 天稚彦が天下りした時、天稚彦に追従
 して下ったとき、天探女は、磐舟に乗り下
 難波の高津に至った
 と解される。
 恐らく、
 天稚彦は、母の根国へすなわち難波あた
 りに至って大己貴の女子下照姫を娶り、ハ
 年間も復命しなかった
 というところなのであろう、と推察される。
 ② また、万巻三十二九二に、
 ひさかたの天の探女が石船の
 泊りし高津は浅せにけるかも
 大意、天の探女が天から乗って来た石船
 の着いた高津は、浅くなったものだ。
 と歌われている。
 〔荒筋第二編「墓制」におき既述〕

2,658^P-5/5

すい
相移

天つき
改行

難波の入江

大阪府の使 27 25 図

米

あまのまぐめ
へ天探女は、南から北へ向つて細長く突出
する上町台地の東側の岸（難波の入江の西側
の岸）に上陸した
と解すべきなのかも知れない。（第327回 因参照）
●つまり、
「その昔、難波の高津の東の岸辺はかなり
深かったはずなのに、——この歌が作られ
た頃には」すっかり遠浅になつてしまつた
という推移が歌の情景にあるのだううと
思われる。

古代の大坂想像図

北土136⁸

四国の南の海

海を渡り、そして豊国の海岸から陸路を牽か

小隊軍へくるまで

新嘗の行事のあと仰臥していた天稚彦の胸に
 命中した。
 命の矢は、天上の国から落ちて下ってゆき、
 天稚彦の妻の下照姫は、号泣して夫の死を
 悲しんだ。
 その様子、天上の国の都に伝えられた。
 天國玉（母か）は、我が子天稚彦が死んで
 まったことを知ると、疾風という者を遣わ
 し、その死体を倭國へもって来させた。
 日本書紀に神代紀第九段本文には、
 天國玉、其の哭ぶ声を聞きて、則ち夫の
 天稚彦の己に死ねたることを知りて、乃ち疾
 風を遣いて、尸を擧げて天に致さむと
 とある。
 察するところ、
 天稚彦が死んだ、まいったことか天
 上の国に伝えられ、さらに、天國玉の命によ
 って疾風が、~~天の下~~天の下の国へやって来る
 迄の長らくの間、ずっと母の根國に安置されて
 いた船の上に置かれ

H30(2018)7.4(水)~7.6(木)
 H31(2019)2.9(土)~2.10(日)
 令和元(2019)7.15(水)~7.16(木)
 令和2(2020)2.25(火)~2.27(木)
 令和2(2020)11.7(土)~11.9(月)

2,659^P-3/3

$\frac{1}{4}$ $\frac{1}{8}$
 $\frac{1}{8}$

れて阿蘇山を越え、
 後国まで運ばれて
 いた
 のだろう
 と想像される

(*)